

吉備国際大学研究紀要
 (国際環境経営学部)
 第20号, 27-36, 2010

「蟹」に見る台湾作家黄靈芝の日本語能力

岡崎 郁子

The Japanese Language Proficiency of the Taiwanese Author Huang Lingzhi 黄靈芝 as seen in his Novel
Kani (蟹 Crab)

Ikuko OKAZAKI

キーワード: 台湾文学、日本語、翻訳

はじめに

日本統治時代に作家として活躍していた台湾人の日本語能力は、筆者が述べるまでもなく頗る高い水準にあった。それが太平洋戦争の終結と同時に日本語を捨てざるを得ない事態に陥り、ある者は筆を折り、ある者は新たに国語となった北京語を一から習得して再出発した。そしてまたある者は、日本語による自己表現を密かに維持し続けた。

一九二八年生まれの黄靈芝^{こうれいし}は終戦時十七歳、台湾人子弟の通う公学校ではなく日本人子弟のための小学校に通い、日本語には母語のように親しんで育った。将来は作家になる決心をしていた少年の思いは、終戦とともに潰えた。だが彼は日本語を捨て去ることはできなかった。処女作「蟹」⁽¹⁾を日本語で執筆するのは戦後の二十歳頃のことで、六十余年後の現在も日本語で物する現役の台湾作家として意気盛んである。

「蟹」は彼が四十歳のとき自ら中文訳して『台湾文藝』に投稿⁽²⁾し、一九七〇年度「第一屆吳濁流

文学獎」を受賞した作品であり、一人の作家の日本語能力と中文能力が同時に鑑賞できる稀有な一篇と言える。本稿では、文芸を生む言語として、最終的に中文よりも日本語を選択した黄靈芝の日本語能力を中文との比較で見えてゆくと同時に、そこから見えてくる彼の日本語に対する思いを探りたい。

一. 日本語との出会い

黄靈芝は、本名黄天驥^{こうてんき}、一九二八年六月二十日台南に、父黄欣、母郭氏命治の九番目の末っ子として生まれる。父の黄欣(1885-1947)は、南部台湾における屈指の本島人有力者であり、その生涯はほぼ日本の領台時代と重なる。「固園」と名づけられた四千坪の邸宅には、台湾や日本の名士たちが常に集い、日本語はいつも身近にあった。父に社会的地位があったことで、黄靈芝は日本の子どもの通う花園小学校へ上がる。クラスでは台湾人は彼一人で、他はすべて日本人だった。

一九四一年、彼は名門の台南第一中学に入学した

が、入学式の数日後、台湾人の新入生は上級生（日本人）から暴行を受け、黄靈芝は肋骨が一本折れた。彼にとってこの事件は、殖民地に生きる台湾人の悲哀を思い知らされるに充分すぎるほどのできごとであったに違いない。彼は終戦を迎えた十七歳の年に母を、また十九歳で父を亡くした。父が亡くなる前年の一九四六年九月、新制の国立台湾大学外文系に入学するが、翌年四月に一回目の咯血を見る。肺結核は当時不治の病と言われ、療養のため大学を中退して入院生活に入る。この頃、発表のあてのないまま中篇小说「蟹」（日文）の執筆に取りかかる。

一九五一年、国民政府発行の日文紙『軍民導報⁽³⁾』文芸蘭に、詩を投稿したことがきっかけとなって九名の同人が集まり、日文文芸の会ができる。細々と俳句、短歌、詩などを文通の形で回覧していたが、やがて自然に消滅した。その後、一九七〇年に「台北俳句会」を立ち上げるまでの黄靈芝は、病気療養に専念しながらも発表する場をもたない小説を日本語で書いたり、彫刻に勤しんだりしていた⁽⁴⁾。結婚もした。

一九四六年十月二十五日に国民政府が発布した日本語禁止令は、七〇年代を目前に緩和されたとは言えないまでも、呉建堂（1926-1998）が歌誌『台北歌壇』を一九六八年に創設しても叛乱罪云々に至ることはなかった。それを機に黄靈芝は一九七〇年に「台北俳句会」を成立させる。現在でも脈々と継続しており、二十名足らずで出発した台北俳句会の会員は、出入りはあるものの常時八十名ほどで、最近は高齢化が進み物故する会員がとみに多くなっている。

日本語での創作だったがスタートは戦後であったため、統治期の台湾作家と並んで評価されることもなく、戦後は日本語だったが故に台湾では無名に近い作家であった。それでも六十余年の長きにわたって日本語で創作活動を行ってきた彼に対し、二〇〇四年には「第三回正岡子規国際俳句

賞」、二〇〇六年には日本政府より秋の叙勲・旭日小綬章が授与された。「正岡子規国際俳句賞」授賞式に参加するため、彼は生まれてはじめて日本の土を踏んだ。日本の動きに呼応するように、台湾でも二〇〇六年に「第十届台湾文学家牛津獎」を受賞、同年十一月二十五日には真理大学麻豆校区にて「黄靈芝国際學術研討会」が開催される仕儀に至った。黄靈芝研究が台湾でもようやくはじまったと言える。

二. 「蟹」のあらすじとテーマ

中文は戦後になって独学で学んだため、外国語にも等しいと黄靈芝は言う。日本語でまず書かれた「蟹」は、三万八千字の中篇小说だが、『台湾文藝』に掲載された中文の「蟹」は二万六千字と短くなっている。中文を日本語に訳すと、通常約一・五倍の長さになるとされるので、「蟹」の場合もこの長さで不思議ではない。しかし細かく見てゆくと、原文の日本語を逐一中文に訳してはいないことがわかる。日本語にはない部分を中文に付け足している箇所は極僅かで、中文小説としての構成を考慮してか、原文の日本語をあちこちへ分散させて、何とかストーリーを保とうとする努力が窺える。省略した日本語の文章は数知れない。

省略した原文は本来不要な部分だったのであろうか。作家にとって作品は分身であり、不要な文字は一字もあってはならないはずだ。まして黄靈芝は発表のあてのないまま作品を書いていたため、時折取り出しては作品に手を入れ完璧なものを目指すということを何十年も繰り返していた作家である。以下、「蟹」のあらすじとテーマを見た上で、原文のどのような部分を省略していたのか、それは彼の言語能力と関係するのか等、言語の問題に逼りたい。

「蟹」の主人公は、台北の町をうろつく肺病で喘息病みの年老いた乞食である。時は戦後。あるとき盛り場で、酔狂な人から恵んでもらった高価な蟹を一匹たいらげてしまってからというもの、寝ても覚

めても蟹が頭を離れず、「今まで眠っていた生活意欲を根底から揺すぶり出した」ほどの変化を彼にもたらした。もう一度蟹を食うための悲しい努力のはじまりである。そしてついに海へ行けばよいのだとのアイデアが浮かび、台北の町を捨て西へ向かう。だが次第に憔悴してゆき、やがて一步も動けなくなった。草かげに落ちていた動物性の骨にかぶりつき、久しぶりに満腹した彼が改めて辺りを見回してみると、そこはなんと墓場であった。骨の出所を知ってしまった彼は、いつまでも同じところを逃げては転び、転んでは逃げていた。

それから一月ばかり経った頃、老乞食は動けなくなったまま海岸に転がっていた。薄れる意識の中で、ハサミをもった二、三匹の動物が、彼の肉を狭みとって食べているのが感じられた。そして、この期に及んでも彼の胃袋は、まだ何かを求めるようにひくひくと動いていた。

以上が「蟹」のあらすじだが、二十歳前に肺結核を患った彼の、死病に取りつかれた死生観がよく表われている。環境や食の問題が現在ほど意識されていなかった一九四〇年代に、驕る人類への警告を込めたこのような作品を、二十歳の若者が書いていたことに驚かされる。今一つは、戦後の混乱した台湾社会とそこに生きる人々の姿が、「蟹」では生き生きと描かれている点に注目したい。「蟹」に限らず彼の作品はすべて台湾が舞台であり、そこに登場するのは台湾の市井の人びとである。

政治的な主義・主張から最も離れた場所に身を置き、ささやかでありながら生命を賭した抵抗として、日本語を捨てることなく、書くことだけを黄霊芝は心の支えとしてきた。ところが、そうして生まれた彼の作品のほうが、政治意識を明確に打ち出した他の作家の中文を含む作品よりも、戦後の台湾社会や台湾人の心性を見事に浮かび上がらせ、結果としての確かな政治批判となり得ているように思う。老乞食は、戦後日本からは見放され、国民党政府からは迫

害を受けることになった台湾の知識分子そのものであり、蟹は彼らが戦後の台湾社会に見出そうとしていた理想を象徴している。「不安が始終雨雲のように彼を包み、恐怖は時に夢の中にまで現われては、彼を呼び醒ましたりした」と文中にあり、理想が崩れ去ったとき、あとには不安と恐怖が彼らを覆うのみであった。「おいはもう終生乞食以外になれるものはなかった。胃袋をぶら下げて町をうろつくより他に生きる道はないのだった」という一文は、黄霊芝自身の叫びであると同時に、台湾の人びとに共通する苦悩でもあった。誰も救ってはくれないし、理想の社会も実現しない。自らを偽って落ちぶれてゆくしかない日々の暮らしの中で、日本語だけが黄霊芝の心を辛うじて支えていたのだ。

三. 作者が体験した翻訳の困難さ

「蟹」の原文は日本語である。中文に翻訳してみると、(一) 原文が削除され、消えた部分がある (二) 原文とは異なる表現 (三) 卓越した原文には及ばない、結果となった。

(一) 削除された原文部分

- ・しばらく前、月の満ちかけた頃に嵐が来て海を荒してしまった。
- ・一步一步、歩く度に痩せて行くような気がした。
- ・糧にすべき貝は湧くべくもなかった。
- ・死は最早、彼に分別を与えるほど怖いものではなくなっていた。
- ・宝石のように冷やりとする快い触感が喉を擦り、ぞくぞくとする芳醇な肉塊は、湿りを含んで露のようにしっとり甘かった。最早人生はどうでも好かった。(はじめて蟹を口にしたときの感想・筆者補足、以下同様)
- ・汀を洗う、退いては寄せて来る浪がしらにも宿命がある筈であった。
- ・すると不意に母親の顔が臉に浮んで消えて行った。

母親に呼ばれたような気がした。妙に心細かった。
どうして皆にはぐれてしまったのだろう。

- ・不安が始終雨雲のように彼を包み、恐怖は時に夢の中にまで現われては、彼を呼び醒ましたりした。
- ・おいにはそれぞれの家の俸給の額も大体見当がついていたし、ものの哀れを感じずることもあった…
(乞食という職業柄)
- ・食べる中が花である。
- ・だが食うにしては矢張り分別がなさ過ぎるのだった。一瞬の快樂を長い苦勞に置き換えるには、一瞬は余りにも短か過ぎた。(蟹を前にして、食べようかどうか躊躇するさま)
- ・おいは多分結婚式が終ってこれからいよいよお嫁さんをしゃぶろうと云う時のお婿さんが矢張りこう云う風に胸をときめかすのだろうと思った。(いよいよ蟹をたべようとしたときの心境)
- ・おいはもう終生乞食以外になれるものはなかった。胃袋をぶら下げて町をうろつくより他に生きる道はないのだった。
- ・死ぬことが出来たら？おいは事実人生に疲れ果てていた。おいにとって死は恐いものではあったが、同時に安住の地でもありそうだった。おいは死んだお母さんを羨しいと思った。
- ・おいはもともとおつりを貰うのが大好きで、おつりを貰うと何だか損をしないで済んだような気もしたし、又おつりをくれた人が善良なような気もするのであった。
- ・おいはごりごりと盛り上った逞しい百姓の腕を想像した。あれでぶん擲られたらお仕舞いであった。
(畑から野菜を盗もうとして)
- ・上には上があると云う言葉があるが、下にも下があるのだと思った。
- ・命までが吐き出されそうになるほど咳き込んだ。誰かが「死」のように冷たい手で首筋を撫でて行ったのも感じていた。
- ・風が立っているのか、海が凧いでいるのか、それ

も解らなかった。

以上挙げた以外にも、削除された原文は多数あるが、蟹に対する執拗な執着は繰り返し出てくるので、すべてを挙げることは避けた。またストーリーとの関係や作者の人生観が表われていると思われる重要な文章を中心に挙げてみた。母親に対する思慕の情などは、物乞いを生業としている主人公の心情を知る上で重要だと思われるが、残念ながら中文では省略されている。生まれつき乞食だったわけではなく、たぶん暖かい家庭があり、頭もよかったに違いない主人公の背景が垣間見える。そして、次第に死に向けて心の準備をしてゆくような主人公の独白とも取れる文も中文ではなくなっている。それだけではなく、原文の日本語の表現が凝っていて、中文に訳するのが容易ではない文を削除しているとも言える。

(二) 原文とは異なる表現

何より、主人公は自分を「儂^{わし}」でもなく、「俺^{おれ}」でもなく、まして「僕^{ぼく}」でもなく、「おい」と称している点で、黄靈芝の日本語に対する熟練した表現力を感じる。「儂」はただの老人だし、「俺」はチンピラ風だし、「僕」では幼さと清潔さを感じてしまう。「おい」には、墮落した人間でありながら、少しばかりの教養と悲哀と侘しさがあり、読者の共感を呼ぶ。この作品では「おい」でなければならぬのだ。中文は「我」しか使いようのない点で、表現できる範囲が狭くなるように思う。この一点のみで、黄靈芝がなぜ日本語を選択したのかわかる気がする。

次に挙げるのは、中文訳はあるがニュアンスに相違のある場合である。黄靈芝自身による中文訳に、さらに筆者の日文訳をつけてみた。

- ・彼は海辺を歩いていた。とほとほと歩いていた。
他走着海邊。磨磨蹭蹭地走着海邊。
〔彼は海辺を歩いていた。のろのろと海辺を歩い

ていた。…筆者日訳、以下同様)

・夕暮の赤い太陽が彼の背中を染め上げていた。
水平線上的紅陽一浮一沉、把他那疲倦的背影染上
黄昏暮調。
〔水平線上的赤い太陽が浮いたり沈んだりして、
彼の疲れた後ろ姿を黄昏色に染め上げていた。〕

・浜辺には無数の貝殻が散らばっていた。貝殻は零こぼれた光を集め合って七色に光っていた。
砂灘上掉落着襍亂而無數的貝殻、無言地、幽幻地、
反映着恍惚的彩光。
〔浜辺には無数の貝殻が乱雑に散らばり、夢みる
がごとき、美しい光を密かに反射していた。〕

・音すらも聞えない静かな夕暮である。その中を彼はとほとほと歩いていった。潮が寄せては足もとの砂を洗って行った。彼はさっきから腹が減っているのであった。
海灘的潮味隨着靜浪、不斷地洗着脚下的細砂、潮來又退引。他孤孤單單地走着。
〔海辺の潮の香りが静かな浪とともに寄せては引いて、いつまでも足もとの砂を洗っていた。彼は一人ぼっちで歩いて行った。〕

・彼の恐れていた夜が刻一刻と天を圧縮しながら舞い降りて来ていた…
可是運氣總有斷息的一刻、那討厭的夜闇漸漸降臨。
〔しかし、運もいつかは途切れる時があるもので、恐れていた夜の闇が刻一刻と舞い降りて来ていた。〕

・その時になって彼は秋が立っているのに気がついた。
這時、他體會到使人擔憂的那個秋涼季節、已經來到了。

〔その時になって彼は、人を憂鬱にさせる秋がすでに到来していることに気がついた。〕

・夜は既に海に抱き込まれて、潮の上にたゆたえていた。
天色已經黑了。
〔空はもう暮れていた。〕

・星がさらさらと彼に囁いた。
滿天的星群好像向他講些什麼。
〔滿天之星たちが彼に何かを囁いた。〕

・何時か睡魔が彼の臉を閉じる為にやって来ていた。不知不覺之中、他的身心已經躺在睡魔的搖籃裡去。
〔知らぬ間に彼は、睡魔という揺りかごの中に身も心も委ねていた。〕

・死ぬぞい、若けえの。誰が無闇に物を食えと云っただ。
你這個死東西、誰叫你亂吃亂跑。
〔この死に損ない、誰が無闇に食ったり走ったりしろと言ったのだ。〕

・——お婆はもう帰るのけ？ すると婆は喉を詰まらせて鳥のように笑った。
——妳要回去了嗎？ 老婆咕咕咕地笑。
〔——お婆はもう帰るの？ 老婆はクックツと笑った。〕

・——いえ、へえ、結構どす。いえ、へえ、結構どす。
——噫！ 不不……
〔——へえ、いえいえ……〕

・だが一步を踏み出したおいは糸のようによじれて足元にくたばった。
可是起步走動的我、竟維持不住而倒在地上。

〔だが一歩を踏み出したおいは、頼りなげに地面に倒れ込んだ。〕

- ・馥郁と風は潮にたゆたえていた。
海、帶着一股馥郁的臭味、潮來而潮去。
〔海は心地よい香りを漂わせ、潮は満ちては引いていた。〕

翻訳はまた新たな文学を生む、という点で、表現やニュアンスが異なるのはある意味当然である。だが、「星がさらさらと彼に囁いた」一文などは、その表現の巧みに読者を唸らせる。「さらさら」は、水が流れる音、木の葉などが風に揺れて発する音というイメージが日本人にはあるが、それを「さらさらと囁いた」と表現した黄靈芝の繊細な感性に驚嘆させられる。そして正にその場面では、星はさらさらと彼に囁いたであろうと読者の腑に落ちるのだ。また「秋が立つ」「たゆたう」等も美しい表現である。

「とほとほと歩いてきた」という日本語の「疲労感」や「孤独感」をともなう一抹の寂しさらしきものは、中文には感じられない。また、「貝殻は零れた光を集め合って七色に光っていた」などは、翻訳しないほうがむしろよいように思う。

「死ぬぞい、若けえの」「いえ、へえ、結構どす。いえ、へえ、結構どす」など、どこの方言か不明なこういう表現も黄靈芝は得意とする。台湾人の手になる最初でたぶん最後となる日本語の『台湾俳句歳時記⁽⁵⁾』を彼は上梓しているが、その中に「乞食祭」一項があり、台湾の乞食には守護神がいて陰暦の四月十一日には元祖祭を行なうとある。説明文を「今日、乞食は墮落し、町さうろつきて犬に似、情けなや、涙が出るだぞえ」で締めくくっている。また「台湾呆け」一項は、「台湾呆けという言葉があったのをご存知やろか」ではじまる。臨場感を盛り上げるために彼が使う方言とも言えないこのような文体は、よほど日本語に精通していないと使いこなす

ことは困難である。

(三) 卓越した原文に及ばない中文

次に中文に比べ、原文の日本語のほうが優美で巧みな文体を見てゆく。

- ・飲んべえの亭主が蒟蒻のように酔いつぶれて帰って来た時に、寿司だのおでんだのを買って来て細君におべっかを使った証拠で、一見臆病そうでも人も好いのだが、酔いが醒めれば元の木阿弥で、愛妻家でも何でもなく、むしろ偽善者で利己的で…這就是表示主人喜歡飲酒、三更半夜回家時、為避免太太的忿怒、買了一包小小點心奉獻老婆、可稱是個偽善家。

〔飲んべえの亭主が真夜中に帰って来た時、細君の怒りをかわすためにちょっとしたものを買って来て細君にあげた証拠で、偽善者とも言うべきものである。〕

- ・おいは胃袋の底まで見透かされたように年甲斐もなく赤面したのであった。

這時的我的心——羞恥——是無法形容的。

〔この時のおいの心は、恥ずかしさでいっぱい、何とも言えないものであった。〕

- ・どんでん返しをしている胸が少し治って来ると…過些時、心情安定下來…

〔少しすると、むかつきがおさまって来た…〕

- ・女の中には尻の上にずれ落ちた赤子が芋ころのように潰れてしまうのも忘れて、前のめりになって先を争うのもあれば、はだかったおっばいが群衆の肩やら背やらに挟まれてへし潰され、それが抜こうにも抜きとれずに、丸で飴かなんぞのように長々と引っ張りながら喚き立てたり、或る者はもう手に二袋も三袋も握っているながら尚小さい子供

を肩車に載せて、子供に手を出させている要領の
 好い奴も居った。(女乞食のようす)

有的女人忘記了背上的嬰孩已經變做蕃薯般地哭不
 成聲、有的是懸垂的老乳房被人家的肩膀挾住、拔
 也拔不出來、哭也哭不出來。有的是手裡拿着三、
 四包錢袋尚且抬起小孩、由小孩伸手強索。

〔ある女は背中の赤子が芋ころのように潰れて声
 もなく泣いているのも忘れ、ある女は垂れ下がっ
 たおっっぱいが人の肩に挟まれて、抜こうにも抜
 き取れず、泣こうにも泣けないでいた。また、あ
 る者は手に三、四袋も握っているながら、尚子ども
 を肩車に載せて子どもに手を出させていた。〕

・彼の声は何とか云う大王のように力があつた。

可怕的命令兇而嚴厲。

〔恐ろしい命令は、凶暴で厳しいものであつた。〕

・おいは米搗きバツタのようにぺこぺこし、頼んで
 いると云うよりは謝っているのだった。

我賠罪似地叩叩頭。

〔おいは詫びるようにぺこぺこした。〕

・奴はおいに叩かれていぎたなげに引っくり返つた。

(奴とは蜘蛛のこと)

它被我打到、掉落在地上而八脚朝天。

〔奴はおいに叩かれて、地面にころげ、引っくり
 返つた。〕

・都会人はどう云う訳か田舎者より何だか高級なの
 である。

因為我是城市人、總比他們高級一點。

〔おいは都会人だから、彼らより少し高級なので
 ある。〕

・雨季がそろそろ北部へ廻つて来る頃であつたが、
 幸なことに何処かで道草を食っていた。

雨季雖不久即來、但很幸運的、還沒有淋到它的苦味。
 〔雨季はまもなく来る頃であつたが、幸なことに
 それに濡れるという嫌な目にはまだ遭つてなかつ
 た。〕

日本の亭主は、外で酒を飲み酔つ払つて帰宅する
 際、時々「寿司」やら「おでん」やらを申し訳のよ
 うに土産として持ち帰ってくることもある。そう
 いった習慣をよく知っているからこそその文である。
 もちろん台湾の亭主たちも家族に土産を買ってくる
 ことはあるだろうが、「寿司」や「おでん」ではな
 いだろうから「點心」とした。細かい気配りである。

女乞食が物をもらおうと先を争っている描写は、
 一文がととても長い。センテンスの長さは、川端康成
 を例に挙げるまでもなく日本語の特徴の一つでもあ
 るが、黄靈芝も挑戦してみたのであろう。とてつも
 なく長い文ではあるが、女乞食の必死さ・緊迫感を
 丁寧に描いて見せた点で名文と言える。

四. 黄靈芝の日本語に対する思いと日本での評価

黄靈芝が最終的に日本語を選択したのは、文芸上
 の選択であり、そこに政治的な計算は働いていない。
 彼自身、次のように言う：

私は見よう見真似で中国語で小説を書いては
 いる。がそれには日本語で書く以上に、恐らく
 は十倍以上の努力を要し、そして多分十分の一
 ほどの効果も上っていないのではないかと懸念
 している。短かい人生に於いてこれだけの浪費
 をしなければならぬ理由が何処にあるのだろ
 う⁽⁶⁾。

一時は日本語で書いた何篇かの小説を自ら中文に
 訳し『台湾文藝』にも掲載されたが、やがて日本語
 による創作に専念してゆく。「日本人の糞を食つて
 生きている」とか「殖民地後遺症」とか台湾人から

非難されたこともあるが、日本や日本人にへつらう気など毛頭もない。ただ自分が生きた証として死ぬまで書き続ける作家、それが黄霊芝である。

また言語の問題については次のように述べている：

言語が持つ特徴とは、たとえばフランス語は時間の経過に敏感であり、日本語は助動詞をそそのかして時刻に匂いをつける。私たちの台湾語はというと、相手の祖先から子々孫々までを罵り止まない一生懸命さを庇う勇ましさに富み、討死をも辞さない。いいかえれば言語には表現能力の差とその限界があり、文芸上の完璧さを念願する場合、この題材はスペイン語で物し、この主題はアムハラ語に限る、といった事態が必ずや起きるはずでありながら、その使い分けを私たちがなし得ないでいるのは脳みそが一・三グラムぐらいしかないからであり、霊長の誉れにはとてもそぐわない⁽⁷⁾。

彼は奇を衒っているのではない。戦後自国語となった中国語にも挑戦し、フランス語とスペイン語も十数年学んでいる。必死で努力はしたが、彼には自国語（中国語）が他国語（日本語）ほどには自由に操れなかったのである。

つまり、言語にはそれぞれがもつ特徴があり、彼にとっては日本語のほうがより微妙なニュアンスの表現ができ、中文ではどうしても中文のもつ良さが表現し切れないということではないだろうか。それは以上見てきた彼自身の手になる日文と中文からも明らかであるように思う。だが、台湾に日本語で創作している台湾作家がいることを日本人が知ったとしても、「日本人を超える文章が書けるわけではない」「日本語はやはり日本人が先生で台湾人は生徒」といった先入観念をなかなか拭い去ることは難しい。それならと筆者は、黄霊芝の作品を日本で上梓する

ことを思いつき、その際「黄霊芝」という三文字ではなく、「国江春菁^{くにえしゆんせい}」という日本人らしき名前を出すことにした。「国江」というのは、父の黄欣が改姓した折のもので、黄霊芝も一時「国江春菁」を名乗っていた。日本の読者に国籍ではなく、文章力やストーリー性等で作品に対してほしかったのだ。こうして、二〇〇二年二月二十八日、慶友社から国江春菁著・岡崎郁子編／解説『宋王之印』が世に出た。短篇中篇合わせて十五篇を収めている。

上梓から時を経ずして『宋王之印』の書評が四紙に出た⁽⁸⁾。一紙は簡単な新刊紹介程度だが、他の三紙は本格的な書評である。黄霊芝と面識のあるのは『朝日新聞』の文芸部記者・音谷氏のみで、他の方々は該書を通じてはじめて彼の作品に接したことになる。黄霊芝作品の文芸性については四紙とも高く評価しているが、興味深かったのは音谷氏が「同じ日本語でありながら、近年の日本の文学作品とは違った味わいがある。どこが違うのだろうか」と評したのに対し、文芸評論家の勝又氏が「日本の昨日今日の小説と少しも変わりがないことに、まず驚いた。これらはちょっと人名を変え、地名を伏せてしまえば、日本の小説だと言っても少しも違和感はないであろう」と一見相反する見方を示した点である。正にこの点こそ、筆者が作者名を曖昧にしようと苦心した最大の理由なのだ。つまり、音谷氏は黄霊芝の個人情報の詳細に知っているからこそ、そのような反応が自然に出てしまったのであり、一方、勝又氏は『宋王之印』一書以外に全く黄霊芝という人物を知らないが故の文なのだ。この両氏の書評が日本で出ただけで、出版の意味があったと筆者には思えるのである。

『宋王之印』には「蟹」以外に、二・二八事件に題材を採った「董さん」、少年の淡い恋を描いた「紫陽花」、小さな日常を描きながら読む者を作者の世界に引きずり込まずにはおかない「におい」「毛虫」、人間の深層心理を描いた「古稀」「癌」「輿論」等が

あり、表題の「宋王之印」では骨董を蒐集するマニアの喜びとスリル、ロマンを余すところなく描き出している。これだけの世界文学が埋もれるのは、台湾に止まらず世界の損失である。

おわりに

中文の「蟹」は高い評価を得たからこそ、呉濁流文学獎を受賞している作品であり、構成から見ても表現力から見ても完成した文芸作品である。一文芸作品として見た場合、日文の「蟹」と比較しても遜色はない。だが、この作品にはたまたま日文による原文があったため、それぞれの言語による力量の比較を試みたら、上述したような相違を発見したということだ。戦後独学で一から学んだ中文をそのまま研鑽していれば、黄靈芝は中文作家として世に出ていたかもしれない。「日本語には漢字、ひらがな、カタカナ等があり、場合場合によってそれを使い分けることができるので、ずるい言語だと思う」と彼は日頃口にする。たとえば「天中殺⁽⁹⁾」一篇の最後は「——それから一年ほど経ったある日、寝室の床下から白骨が一体分でて来た」で終わっているが、「出て来た」「出てきた」「でてきた」というように書きかたの選択ができる。どの書きかたを選んだかによって、微妙なニュアンスの違いが出ると彼は言っている。彼は「ずるい」と言いながら、そういう日本語のもつ「ずるさ」を楽しんで書ける点が気に入っているのではないだろうか。

とまれ、黄靈芝の日本語能力は、勝又氏が「井伏鱒二や梅崎春生を読むような気分染められる」と評しているほどの一級品であることには間違いがない。

【注】

- (1) 黄靈芝「蟹」(日文)は、私家版として出版された『黄靈芝作品集』巻一(一九七一年一月一日)所収。本稿の日文部分の引用はこれに拠る。

- (2) 黄靈芝、「蟹」(中文)を『台湾文藝』二十五期(一九六八年十月)に発表。本稿の中文部分の引用は、鍾肇政主編『吳濁流文学獎作品集(上)』鴻儒堂出版社(一九七七年八月)に拠る。
- (3) 日文紙『軍民導報』が創刊されたのは一九五〇年六月一日で、少なくとも五一年七月までの発行は確認できる。国民政府の政策や法令を台湾同胞、特に山地同胞に徹底させる目的により、暫定的な措置として実施したもので、中に日文の文芸欄が設けられていた。
- (4) 台湾大学在学中、黄靈芝は当時台湾彫塑界の第一人者であった蒲添生(1912-1996)のアトリエに通って彫塑の勉強をしていた。「盲女」と題した彫刻が一九六二年の「第二回巴黎国際青年芸術展」に入選、同作品は翌六三年台湾の「第十七届省展」では特選第一位に輝いており、文芸創作と同様に彫刻も彼が心血を注いだ芸術である。
- (5) 黄靈芝は、日本の俳誌『燕巢』に九年近く連載した「台湾歳時記」を加筆修正し、『台湾俳句歳時記』言叢社(二〇〇三年四月十五日)を刊行している。季題は全部で三百九十六題を数える。
- (6) 『黄靈芝作品集』巻一(一九七一年一月一日)、「自序」。
- (7) 同注(6)。
- (8) 1. 新刊紹介『宋王之印』『台北週報』第二〇四二号(二〇〇二年三月二十八日)
2. 読書・勝又浩評『宋王之印』『東京新聞』(二〇〇二年四月七日)
3. 文化・音谷健郎評『宋王之印』『朝日新聞』(二〇〇二年四月十三日)
4. 書評・山田敬三評『宋王之印』『図書新聞』二五八九号(二〇〇二年七月十三日)
- (9) 『黄靈芝作品集』巻九(一九八三年十一月二十三日)所収。

【附記】

本稿は、2008年12月20日、台湾の国立政治大学外国語文学院主催「第1届中日韓翻訳與跨文化国際學術論壇」において、「日治時代台湾人的日語表現-從『蟹』論黄靈芝的日文能力」と題して中文にて発表した論文を、日文に改めるとともに加筆・修正したものである。

